

河原の風景

—ライプツィヒ民族学博物館所蔵「四条河原遊楽図屏風」について—

江村知子（東京文化財研究所）

お雇い外国人のドイツ人医師・ショイベ Heinrich Botho Scheube の旧蔵品で、現在ライプツィヒ民族学博物館 GRASSI Museum für Völkerkunde zu Leipzig に所蔵される「四条河原遊楽図屏風」（二曲一隻）は、これまでほとんど知られてこなかった作品であるが、同画題の代表的作例とされる個人蔵本（二曲一隻）および静嘉堂文庫美術館所蔵本（二曲一双）と多くの共通点を持ち、不明な点の多い近世初期風俗画の研究において新たな研究の進展を期待させる重要な作品である。本発表では個人蔵本・静嘉堂文庫美術館本・ライプツィヒ本の三作品について比較検討し、作品の成立と表現の変遷について考察を行う。

四条河原遊楽図は、初期歌舞伎と呼ばれ、ごく短い期間に隆盛を極め、絶え失せた女歌舞伎・若衆歌舞伎の舞台を描写するほか、女性の太夫と三味線弾きによる人形浄瑠璃の小屋も描かれており、演劇史・芸能史・音楽史の分野からもとりわけ注目されてきた。ライプツィヒ本は個人蔵本および静嘉堂文庫美術館本をつなぐような描写内容を備えているが、制作年代としては、個人蔵本、静嘉堂文庫美術館本が制作されて少し後に制作されたものとみられ、それぞれの表現の特徴から、筆者はすべて異なる可能性が高いことを指摘する。また人物などの姿形の輪郭線が完全に一致することが認められる一方、着物の色や文様などは全く異なっていることから、作品そのものから図様が継承されたのではなく、線描による粉本を介してその表現が広がっていくことを明らかにする。

またこれまでの研究では特に言及されることがなかった細部描写についても着目する。三作品に共通する風俗表現として、駕籠舁きの男性の露出した上肢・下肢に白い円形のものが貼り付けられているのが確認できる。これは灸治の跡に膏葉を塗った紙を貼った「灸の蓋」である可能性が考えられることを指摘する。この表現は他の四条河原遊楽図などにも見ることができ、当時実際に行われている民間治療の様子を知ることができるだけでなく、人の姿と営為をこうした現実感のある描写とともに描きこむところに、四条河原遊楽図の表現の特質が認められることについて指摘する。以上のように画面形式、全体的な構図、モチーフの配置、線描や彩色状態などの考察から、四条河原遊楽図がどのように画題として確立し、変遷していくのか、その状況を明らかにする。